

原 著

保育者の成長における保育実践の振り返りの意味について —保育体制が移行したある幼稚園の事例をもとに—

中島 寿子

〈要 旨〉

本研究は、保育者の成長における保育実践の振り返りの意味について考えるため、保育体制が縦割り保育に移行したある幼稚園を対象とした。保育体制が移行した年度の1学期の保育と園内研修を取り上げ、保育者は保育体制の変化をどのようにとらえて保育をし、その保育をどのように振り返ったのか、そこには同年度から継続的に行なうようになった園内研修がどのような意味を持ったのか、保育者へのインタビューをもとに検討した。その結果、保育者たちは保育体制が移行して様々な点に戸惑い悩みながらも、縦割り保育の中でこれまでに見られなかった子どもたちの成長をよかったこととしてとらえ、そのことがより子ども自身の育つ力を信じる保育観への変容にもつながったことが明らかとなった。そこには、継続的に行なった園内研修によって保育者間に自分の思いや考えを話し合える関係が次第に築かれ、保育者が相互に支え合いながら保育実践を振り返っていったことが、大きな意味を持っていたことも明らかとなった。

キーワード：縦割り保育、振り返り、園内研修、保育者間の話し合い、保育者の相互支援

I 問題と目的

保育者の成長において日々の保育実践を振り返ることの重要性が指摘されており、これまでも様々な考察が行われてきた。例えば田代(1996)は、第三者として継続的に参加したある園内でのカンファレンスのプロセスを振り返り、「話題提供者の問題意識に沿う形でのカンファレンス」が、「園内での個々の保育者の主体性の確立とその結果としての共通理解の意識化に有効に機能すること」¹⁾を指摘した。

巡回相談員として保育の場に長年かかわってきた大場(2007)も、保育者が自らの実践に関する問題を協議の場に提示し、「全同僚がそれぞれの立ち位置から発言し合い」、その問題に関する現状や問題点等を共有し合うこと、見通しをもった協働が可能となるように定期的にこのような協議の場をもつことが保育者の専門的な発達を促すと指摘し、自らは「外部者として」「協議に参加し、問題の理解と解決の方向性を探るために協働する」²⁾立場をとり、「保育現場においてパワーアップが必要であるのはこのパートナーシップで

あ」り、「この点に関する実践研究が必要である」³⁾とも指摘した。

筆者(中島, 2009)も継続的に参加したある園の園内研修を振り返り、保育の質を高める園内研修となるために必要な点として次の6点を挙げた。1. 保育者集団のリーダーによるリーダーシップの発揮、2. 園内研修の体制作り、3. 保育者の自己評価、日々の保育実践との循環、共通理解の深まりが促される内容と方法、4. 子どもや保育について話しやすい関係作り、5. みんなで考えていこうとする保育者集団であること、6. 保育者の主体的な園内研修への取り組みを支える外部からの参加者の存在⁴⁾。

本研究では保育体制が移行した園の移行年度1学期の保育と園内研修を取り上げ、保育体制の移行を保育者はどのようにとらえて保育を実践し、その実践をどのように振り返ったのか、そこには同年度から継続的に行なうようになった園内研修がどのような意味を持ったのか、保育者へのインタビューをもとに明らかにし、保育者の成長における保育実践の振り返りの意味について考えることを研究の目的とする。

II 研究の方法

1 対象園

200X年度に保育体制が移行した私立幼稚園A園を対象園とする。

1) 保育体制移行の経緯と200X年度の保育

保育体制移行の経緯 200X年度の前年度9月に副園長から保育者に保育体制の移行が提案され、同年齢児の保育を保育者1名で担任する保育体制から、異年齢児の保育（以下「縦割り保育」と表記）を複数の保育者で担任する保育体制へと移行した（表1参照）。

200X年度の園生活 縦割りグループでの生活が基本となったが、年級別の活動をする時は隣り合う2グループの各年級が一緒に行なった。そのため、縦割りグループの担任保育者は年級の担当もあった。

200X年度の保育者の経験年数 主任保育者：11年目、担任保育者：17年目・9年目・7年目・5年目・3年目各1名、2年目・1年目各2名、障がい児加配保育者：4年目1名。

2) 園内研修の進め方

200X年度から継続的な園内研修を行なうこと、外部からの助言者として筆者が参加することも、200X年度の前年度末に副園長から保育者に提案された。

そして、副園長と主任で毎月の計画の際に時間を設定し、200X年度1学期に園内研修を計5回行なった（保育後の1時間半程度。前年度3月末含む）。参加者は副園長、主任保育者、担任保育者9名、障がい児加配保育者1名、筆者である。第1回時に筆者より保育者が司会・記録を担当すること、記録を参加者に配布するとともに園でもファイルして保管することを提案し、司会（1名）・記録（2名）を保育者が順に担当していった。

このような保育体制に移行したA園の保育を理解するため、筆者は200X年度1学期に保育観察も計9日行なった。

200X年度1学期の園内研修の概要を、筆者の記録

とA園の園内研修記録をもとに表2にまとめた。園内研修記録は、研究の目的、内容、方法、倫理的配慮について説明をし、園長、副園長および保育者全員から同意を得た上で資料とした。

2 インタビューについて

1) インタビュースケジュールの作成

200X年度1学期の園内研修の内容（表2）もふまえ、インタビュースケジュールを作成した^{注1)}。

2) インタビューへの協力依頼

200X年度からの保育と園内研修についての保育者の率直な思いや考えを理解することがインタビューの目的であること、その内容、方法、倫理的配慮について保育者に説明をし、インタビューへの協力を同意した保育者のみを対象とすることを説明した。その結果、保育者全員から同意を得ることができた。

3) インタビューの実施方法

時期 200X年8月（子どもたちの夏休み期間）

場所 A園内保育室（担任保育者は担任グループの保育室）

対象 保育者11名（主任1名、担任保育者9名、加配保育者1名）

インタビューの進め方 各保育者に事前に渡していたインタビュースケジュールをもとに、個別に実施した。保育経験について確認後、200X年度1学期の保育と園内研修について質問項目にそって質問した。保育者が話した内容についてさらに確認したい場合は、具体的説明や事実関係の説明を求める質問を加えて話してもらった。インタビューの最後には、保育者から聞きたいことはないか確認し、質問があった場合は簡潔に答えた。インタビューを終えた感想も語ってもらい、インタビューの内容やそこで経験した感情を保育者が整理する時間にもなるようにした。

インタビューの内容については、メモをとるとともに、本人の了解を得た上で録音した。

表1 保育体制の移行

200X年度以前	200X年度
園長、副園長、主任保育者、担任保育者7名 ・満3歳児1グループ（担任保育者1名） ・3歳児、4歳児、5歳児、各2クラス（担任保育者各1名） ^{注)} ・主任保育者は保育全体をサポートする。	園長、副園長、主任保育者、担任保育者9名、加配保育者1名 ・満3歳児1グループ（担任保育者1名） ・3・4・5歳児縦割り4グループ（担任保育者各2名） ・主任保育者は保育全体をサポートする。

注) 担任保育者が新任の場合は年度当初に補助の保育者が入ったり、障がい児がいる場合は加配保育者が入ることはあった。

表2 200X年度1学期の園内研修の概要

<p>第1回 3月26日 参加者：副園長、主任、保育者10名、筆者、計13名</p> <p>●週案、日案・記録の様式について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今までの様式に、縦割りグループの生活と各年級の生活を入れて検討 ・個人記録の様式、年級担当からグループ担任への連絡用紙の様式も検討 <p>●筆者からの提案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回、保育者の中から司会1名・記録2名を決め、園内研修を進める。 ・日時、メンバー、内容を記録にまとめ全員に配布し、ファイルもする。 <p>→話し合いの司会と記録担当者を決める。</p> <p>●保育者から挙げられた議題について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳の取り扱いについて ・礼拝・集まりでの座り方について ・グループ・年級で取り上げる絵本について 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの3歳児では置いてなかった折り紙を出すと、3歳児が「折紙が楽しかった」と言っていた。 ・3歳児が物おじせず、4・5歳児を見よう見真似でできるようになっている。 ・3歳児が異年齢児といることで落ち着いて過ごせている。 ・主任：子どもが自分で遊びを見つけ遊んでいる。保育者も落ち着いている。 <p>●副園長から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者も去年に比べて笑顔。子どもの暴れ合いも少なくなった。怪我がない。 ・もう少し縦割りグループで過ごせるように移動を少なめにし、自発的な遊びを中心として環境を通しての保育を。 ・どうしても年級でしないといけないことは何かを確認する。 ・縦割り保育のよさも理解してもらえるように保護者にも伝えて行く。 <p>→5歳児担当保育者：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「これを一緒にしたい」という活動がいっぱいある。 ・他の保育者と連携すればできるかも知れない。どこに視点を置くか。
<p>第2回 4月2日 参加者：副園長、主任、保育者9名、筆者、計12名(欠席1名)</p> <p>●週案、日案・記録の様式について(前回の話し合いをふまえて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主任：週案、日案、グループ間の連絡用紙の様式案の紹介 ・様式案をもとにした話し合い <p>●保育者から挙げられた議題について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当番について(飼育：グループで順に担当、給食：各グループ4・5歳児が順に担当) ・給食時の座り方について(当初は年級ごとに着席) ・絵本の貸し出しについて(年級別からグループ別へ) <p>●副園長から：日課(生活の流れ)の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの一日の見通しがつく生活のリズムを第一に考える。 ・担任間で連携して遊びへの援助をする。 <p><午前保育の場合> 8：45～9：00 登園、 9：15～10：00 戸外遊び、 10：00 片付け、集まり、礼拝 10：30 5歳児：主活動、3・4歳児：室内遊び 11：00 降園準備、帰りの集まり 11：30 降園</p>	<p>●筆者から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の安心感もあって子どもが落ち着いているのではないか。 ・「今までこうしていたから」にこだわりすぎると難しい。本当に年級でないとおさえられないのか、柔軟に考えてみる。 ・移動に時間がかかり、子どもに負担がかかっている。移動が少ない方法を考える必要がある。 ・「視点をどこに」はよい指摘。コーナーで保育する力をつける。他の保育者との連携が大切。これからの保育者の成長が楽しみ。 ・一人ひとりを見る力が必要で、縦割り保育は保育者の力が問われる。これから考え合っていく必要がある。
<p>第3回 5月7日 参加者：副園長、主任、保育者9名、筆者、計12名(欠席1名)</p> <p>●縦割り保育を始めての問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者：年級の活動時に連絡用紙記入は難しく、連絡が不十分。日々の記録も保育者間で話し合っていてできていない。年級の活動を行うための移動に時間がかかる。 ・副園長：年級の活動を少なくするわけにはいかないか？縦割りグループで、子どもが自発的に選ぶ遊びを中心にしてほしい。できるだけ移動がないように。年級の活動はコーナー保育を取り入れてはどうか。 <p>●縦割り保育を始めてよかった点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・去年の今の時期の子どもと比べて落ち着いている。 ・部屋の中が穏やか。一人ひとりが自分の居場所を見つけるのが早かった。 ・5歳児に下の子がいるという自覚が見える。 ・ベアを作って座ることで、自然に関係ができた子どももいる。「しないといけない」感にかられていたが、5歳児が自分たちより気づくこともある。 ・身辺整理でも、5歳児が手伝ったりしている。 ・5歳児の姿から3・4歳児が学んでいる。 	<p>第4回 6月18日 参加者：副園長、主任、保育者9名、筆者、計12名(欠席1名)</p> <p>●縦割りグループ担任保育者への年級での姿の伝え方(前回の話し合いをふまえて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者：室内遊びでは担当年級の隣のグループの様子を確認しづらい。 ・隣のグループの保育者と伝え合っているが、落ちている所はある。 ・わかりにくい分、テラスや戸外で会った時に声をかけるようにしている。週に一度ぐらい年級の活動があると、隣のグループにも伝えられるし、子どもの内面を読み取れる。 ・隣のグループの同年級担当者、互いのグループの子どもの様子について週1回でも共通理解をしておくとうかった。 <p>→課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3・4歳児も週に一度は年級の活動を入れた方がよい。 ・個人の記録を見せ合い、共通理解する必要がある。 <p>・保育者：週に1回金曜に15分でも確実に時間を取っていくとよいのでは。</p> <p>・副園長：毎週金曜日に隣り合うグループで子どもの姿を話し合ってはどうか。</p> <p>→今後の対応・個人記録について 週に1回は情報交換をする時間を作るよう努力する。気になる子どもはみんなに伝える。</p>

<p>・関わりの少ない子どもには、戸外や室内の遊びの時に声をかけていく。</p> <p>●<u>年級の活動のための移動について（前回の話し合いをふまえ）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・5歳児：移動を毎日しなくなったので、その時々の移動を子どもは楽しんでいる。見通しが持ていない子どもに早めにかかるようにしたい。 ・3歳児：時間の余裕がある時は絵本を見る時間もあり、今はゆっくりできている。コーナーでする時も目的をもって作業しており、集中できる。 ・4歳児：5歳児がホール等に移動し、4歳児は隣り合うグループ間の移動なので最近では負担は少ない。移動時に見通しがもてない子どもがいる。 <p>●<u>コーナーでの年級の活動について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・主任：各年級でのコーナー活動（母の日のプレゼント作り）はどうだったか？ ・4歳児：・他年級の子どもが「何してるの？」と興味を持ってくることがあるが、目的を持って製作している。 ・5歳児が他の場所で活動する時、3・4歳児も年級ごとにコーナー活動をしたが、落ち着いていた。 ・5歳児：・時間帯のことを考える必要がある。午後もコーナーを作り、複数担任のもう1名の保育者に援助してもらったことがあった。時間配分が難しい。 ・担当年級のコーナー活動時に、部屋が雑然となっていることがある。自分も余裕を持ち、子どもも落ち着いて取り組める時間にしたい。月案も、もっと余裕をみて計画するとよかったかも知れない。 ・3歳児：3・4歳児（特に3歳児）に意識づけをしっかりとしたい時の製作は、好きな遊びの中での年級のコーナーだけでは難しいのでは。 <p>→その後の話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼントを作る前の気持ち作りが抜けていた。静かな中で意識付けをすることはどの年級でも大事なことで。月案・週案の中でどの保育室をどの年級が使用するかをきちんと決めた方がよい。 ・3歳児はいろんなことに興味がある。落ち着いた中でが必要ではないか。 ・今年の3歳児はたくましいが、4・5歳児がいる分、配慮が抜けているのでは。 <p>→確認したこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今のようなペースでコーナー（年級）活動を行うが、保育者間での打ち合わせを密にするよう心がけ、しっかりおさえたい内容の時は年級での時間をとっていくようにする。 ・保育者同士で話し合い、子どもたちが落ち着いた環境で過ごせるように配慮する。 <p>●<u>週案・日案について（前回の話し合いをふまえ）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・副園長：環境図を入れて環境構成をまとめるようにするとよい。 ・筆者：週案に環境構成・援助が書かれてない。 ・保育者：週の目標を4グループ全体で決めることが難しい。年級の目標を各年級で立てているように、グループの目標も各グループで立てることが必要ではないか。 <p>●<u>筆者から</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・縦割りグループや年級の時間は、園生活の中でどのような時間か、何を体験することを大事にしているのかを考え、保育者として何を知っておくべきかを確認する。 	<p>第5回 7月30日 参加者：副園長、主任、保育者9名、筆者計12名（欠席1名）</p> <p>●<u>年級の姿を伝える工夫（前回の話し合いをふまえ）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・主任：金曜に伝え合う時間をとっていたが、一度も時間がとれなかった。 ・副園長：グループ別保護者懇談会で「年級の活動がわかりにくい」という声があった。終礼で実名を出して伝えあったり、週案でイニシャルで書いて伝え合うようにする。週案はイニシャルで子どもの姿も出すことでわかりやすくなった。 ・保育者：時間のやりくりができるようになり、話し合う時間も取れるようになった。2学期からは年級の話し合いを積極的に行ないたい。 ・主任：時間の流れを守って早く帰れるようになった。 ・保育者：2学期から火・金曜日は話し合う時間をとろうと話している。時間を守り、実施する。 <p>●<u>週案について（前回の話し合いをふまえ）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・副園長：好きな遊びの記述が一行で終わっている。子どもにとって好きな遊びの部分がとても大切。環境図に遊びを書き込んでいく。 ・主任：毎週書くものなので、保育者が書きやすく見やすいものがよい。 ・副園長：縦のグループ作りを。グループで一枚の週案にし、その中に年級別の活動も書き加える。環境図も書き込む。 ・筆者：あるテキストの週案の様式を紹介。環境構成は図で記入するとよい。 ・副園長・主任：全年級・縦割りグループがどこで何をしているかわかるように。夏休みに週案の様式を一人一つ作ってくる。 ・他園での保育経験がある保育者： <ul style="list-style-type: none"> ・前の園では月案を立てる時にしっかり見通しをつけて話し合っていた。 ・3・4・5歳で月案を1枚立て、みんなで確認するようにしていた。 ・保育者：年級担当者間のみで月案を共有し、それを当たり前と思っていた。 ・主任：翌月の予定と一緒に毎月15日まで月案も出してはどうか？ ・副園長：そうすると見通しを持てるし、他年級の保育者からのアドバイスももらえる。教材も早めに購入できる。 <p>●<u>日案について（前回の話し合いをふまえ）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者：・年級活動がある時は縦割りグループと年級活動の振り返りをしているが、年級の活動がない時は縦割りグループの振り返りをダラダラ書いてしまう。 ・他のグループの報告欄が活用できていない。 ・筆者：週案の打ち合わせをしっかりと行えば、今のように週案と別に日案を細かく書く必要はない。週案の様式によって日案の書き方が決まってくる。週案の日々の計画の下部にその日の記録も書くとうか。 <p>●<u>見通しが持てない子ども・個別に配慮が必要な子どもについて</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに見通しが持てない子ども、個別な配慮が必要な子どもを報告し合い、確認し合う。
--	---

4) インタビュー結果のまとめと考察の方法

本研究では保育者11名のうち、200X年度以前から在職していた6名のインタビュー結果をまとめ、考察した(1名あたりのインタビュー時間は51分から1時間45分)。6名の保育経験は以下の通りであった。主任保育者:11年目(主任となって1年目)、縦割りグループの担任保育者:7年目・5年目・3年目各1名、2年目2名。

インタビュー結果を逐語記録にまとめ、内容のまとめごとに分けて小見出しをつけた。そして、質問項目にそって内容を整理し、6名の保育者が保育体制の移行をどのようにとらえて保育を実践し、その実践を振り返ったか、そこには継続的に行なうようになった園内研修がどのような意味を持ったのか考察した。

Ⅲ 結果

1 200X年度1学期の保育について

紙幅の都合上、共通点を中心にまとめた。また、インタビュー結果の一部を表3にまとめた。

1) 縦割り保育になると聞いてどのように思ったか

「200X年度から縦割り保育になると聞いた時、どのように思いましたか」と質問すると、主任を含めた5名が「不安」だったと話し、1年準備して(3名)、「今のまま」で(2名)と思ったと話す保育者もいた。その一方で、主任だけが「期待」もあったと話した(表3①)。

2) 戸惑ったこと

「200X年度の保育を振り返って、戸惑ったこと」として、主任を含めた5名が初めて経験する縦割り保育の中での異年齢の子どもへの対応や(表3②-1)、1学期当初行なっていた年級別の活動時間も確保した上での生活の流れの組み立てを挙げた(表3②-2)。また、担任保育者全員が保護者とのかわりについての戸惑いも挙げた(表3②-3)(保護者に縦割り保育への理解を得るため子どもたちの姿をどのように伝えるか、複数担任制の中で保護者とどのように話していくか等)。

3) よかったと思うこと

「200X年度の保育を振り返って、よかったと思うこと」として、全員が縦割り保育の中で今までは見られ

なかった子どもの姿を見ることができたことを挙げた(表3③-1)。また、担任保育者の4名が複数担任となったことも挙げた(表3③-2)(複数の目で子どもを見ることができる、環境構成のアイデアを出し合える、個々の子どもに対応しやすい等)。

4) 疑問に思ったこと、わからなかったこと、悩んだこと

「200X年度の保育を振り返って、疑問に思ったこと、わからなかったこと、悩んだこと」として保育者が挙げた内容は様々であり、「よかったこと」として挙げる保育者が多かった複数担任であることによる悩みを挙げた保育者も4名いた(表3④-1)。そのうち保育経験の多い2名(5年目以上)は、新任保育者を育てることについても話した。また、同じ2名は年級の活動をどのように行なうのかについての悩みも話した(表3④-2)。縦割り保育で何を目指すのかについて悩んだと話した保育者も2名いた(表3④-3)。

5) 今後の保育の中で大切にしたいこと

「今後の保育の中で大切にしたいこと」として、担任保育者のうち3名が縦割りグループ作りを挙げ(表3⑤-1)、主任は若い保育者を育てることを挙げた(表3⑤-2)。

6) 今後の保育の中での課題

「今後の保育の中で、あなた自身の課題は」という質問に、保育経験の少ない保育者4名(5年目以下)は余裕、ゆとりを持つことを挙げ(表3⑥-1)、主任を含めた保育経験の多い2名(7年目以上)は他の保育者に対する自分のあり方を挙げた(表3⑥-2)。

7) 保育観の変化

「200X年度の保育を通して、あなたの保育観の中で変わった点」について質問すると、担任保育者全員が1学期の子どもの姿をもとに保育観の変化について話した。そのうち3名は子どもの力をより信じる保育観に変化したことを話し(表3⑦-1)、2名は複数担任の他の保育者の姿からも自分の保育を振り返った、保育観が広がったと話した(表3⑦-2)。

2 200X年度1学期の園内研修について

1と同様、共通点を中心にまとめた。また、インタビュー結果の一部を表4にまとめた。

表3 200X年度1学期の保育について

①縦割り保育になると聞いて	・主任「何かこう、好転していくような、そういう期待も、でも確かにあったんですね」
②戸惑ったこと 1 異年齢児への対応	・「年中長（4・5歳児）しか持ったことがないっていうところで、同じ一つのクラスの中で、（3・4・5歳児への）対応にすごく困って」
2 生活の流れ	・「4月当初は各年級の、年級別の活動、主活（主活動）を毎日入れるっていうのを、すごく意識していた分、すごい大変だったというか」 ・「どれが一番子どもにとって、落ち着いて過ごせるのかなっていうのは、すごく戸惑いました」
3 保護者とのかわり	・「やっぱり保護者の対応が難しかったなっていうのが。二人担任がいるので、どっちの教師が子どもの姿を保護者の方に伝えるとか、連絡帳のやりとりとかもそうなんですけども」
③よかったと思うこと 1 今まで見られなかった子どもの姿	・「 <u>としの違うそれぞれの子どもが、すごく刺激し合って、伸びて、普通だったら、ここまでいかないっていうところも力がついてきてるな</u> ⑧っていうのは、すごく、1学期しかまだ終わってないんですけど」
2 複数担任	・「保育観が二倍になったというか。そこは、複数担任になってすごくよかったな—と思います」「環境構成とかも」「いろんなアイデアを出し合えるので」「お部屋を作る時にすごく楽しくなりましたね」 ・「 <u>すごいたくさん目で見れる、子どもを見れるっていうのは、素敵なことだし</u> 」「一人は主でどんどん進めていけて、 <u>個別への対応</u> っていうのも一人ができるので、そういう面では複数担任は助かるなっていうのが、ありますね」
④疑問に思ったこと、わからなかったこと、悩んだこと 1 複数担任	・「もっと先生（新任保育者）も思ってもらえることがあるだろうけど、まあ近すぎて言えなかったりとか、それをどう私は聞き出して、引き出して子どもたちに返していくかっていうのかも…結構難しいなと思いががらしています」 ・「複数担任になったってことで、やっぱりお母さんたちとの関係作りっていうのが、なんとなくこう、今までに比べて、薄いというか中途半端になってるような、自分の中でなんかそういうモヤモヤというか、がありました」
2 年級の活動について	・「年長（5歳児）は特に就学前なので、同じ年齢で伸び合っていく力と、せつかく縦割りにしたんだからグループで過ごす時間を、 <u>どうバランスをとって行ったらいいのかな</u> っていうのを、すごく悩んでいます」
3 縦割り保育で何を指すのか	・「自分は縦割り保育になって子どもたちのどこをどう育てていけばいいのかとか、縦割り保育のよさはどうだ、何なのかというのを、常に疑問に思いながら悩まがらしています」
⑤今後の保育の中で大切にしたいこと 1 縦割りグループ作り	・「一人ひとりの育ちを十分に認めて伸ばしていきたいながら、それが〇〇グループとしての集団にしていきたいなって」「年齢が違うんで兄弟っていうか、のようになりたいなっていうのはあります」
2 若い保育者を育てること	・主任「全然そんなことまで気づかなかったなあっていうこととかを、ほんと若い人が言っていたりして」「もう、としじゃないかと思って」「それをすごく私、今年思ったので、ほんとに、任せて、自信を持たせていくっていう、それで二人ひとりが、 <u>どンドンどンドン言えるようになって、任せられてすごく自信をもつて、楽しく保育ができてっていうのを、大切に</u> ⑨毎日過ごせたらいいのかなって」
⑥今後の保育の中での課題 1 ゆとりを持つこと	・「自分にゆとりを持ったり自分が楽しまないと、見えてこないじゃないけど、必死になるともう駄目だっていうのはすごくよくわかるんですけど、なかなかこれが難しいですね」
2 他の保育者に対する自分のあり方	・主任「思いを聞いて受け止めた後、どう私がとらえるのか、その人たちの思いや意見を、物事をどうとらえるのか、そしてそれをどう判断して、どういうふうに向いていい方向に持っていくようにしていくのか」 ・「やはり先に聞いて受け止めて、できる限りのことをお伝えしたりだとか、私の思いを伝えたりとか、一緒に考え合っていくところを課題で」
⑦保育観の変化 1 子どもの姿から	・「ずっと年少（3歳児）さんを見てきて、今までは守るというかも、もう手取り足取りでやってたところがあった」「 <u>年中長（4・5歳児）とまじって、やることでやっぱり、子どもってやっぱり力があるので</u> ⑩、それを大人が押しつぶすというか押さえつけるんじゃないかと、 <u>うまくその力が発揮できるような、さっと手を出すじゃないですけど、さりげない援助がやっぱり大切なんじゃないかなあって思ってる</u> 。そういう部分で、私の中では変化というか、発見でしたね⑪」 ・「以前までは年級だったので、その時は気がつかないんですけど、 <u>今、3・4・5と一緒にいる生活を過ごしてると、4歳だったらここら辺かなあって、自分でこう、線ひいてたっていうか、幼く見ていた自分がいたかなあって</u> 。特に今年の年少（3歳）児を見ていて力を持っているんだなあっていうのをすごく感じた⑫ので」「 <u>自分の中での、もっと信じて、力を伸ばしてあげてっていうところまで変わったな</u> ⑬っていうのはあります」
2 他の保育者の姿からも	・「（新任保育者の前での子どもの姿を見て） <u>こういう姿も持ってたんだな</u> っていうところがあったので、私と関わってるところではなかなか出せなかったところかなあって。じゃ、それは何かなって考えた時に、ちょっと私がビシッとしすぎてたのかなとか、 <u>囲いに、範囲に、この範囲から出ないようにっていう締め付けがあったのかなとか、そういうところすごく反省したので</u> 」 ・「特に複数担任とかだし、いろんな子どもとも関わるし、いろんな先生と関わってる中で、 <u>ああ、こういうやり方があるんだ</u> っていうのがわかったりとか…ちょっと世界が広がったのはあります」

表4 200X年度1学期の園内研修について

①継続的な園内研修を行なうと聞いて	・主任「園内研修とかを行なっていくと、話す場が与えられますよね」「それはもう、絶好の場が与えられるんじゃないかなって、ちょっと楽しみなどうか」
②戸惑ったこと 1 発言してよかったのか	・「思いついたことを思いついたままですべて言うので、それでいいのかなとか、もっと他の先生の意見を、聞いてから発言すればよかったなあとか、そういうところではいっぱい戸惑いました」
2 結果がすぐに見えないこと	・「例えば週案とか一つにしても、自分にそういう経験っていうか、去年っていうのがすごい自分の中で一番の経験なので」「色々調べたりしても、それが入ってこないっていうか」「 <u>結果が見えないっていうか、どうしたらいいんだろ①</u> 」「 <u>みたいな</u> 」「でもやっぱりここで考えなきゃいけないのには意味があるんだろうなっていうのもすごいあって」
③よかったと思うこと 1 自分の思いや考えを言える	・主任「とにかく、もう、一人ひとりが話せる場ができたっていうことが、まあ一番で」 ・「 <u>日々の保育を振り返っての研修なので、それは自分が保育してる上で感じたことっていうのは自分が一番よくわかる分、あ、ここで私が言ってもとかではなく、こう思いますっていうのははっきり言える環境がある②</u> のは、すごく自分の中でも、で、自分がそれで悩んでるんだって <u>いうのを、みんなに知ってもらえたり、逆にその他の人の悩みを聞けたり意見を聞けたりする場がある④</u> っていうのは、すごく去年に比べていいなっていうのはあります」 ・「 <u>いろんな先生が、徐々にですけど、意見を出せるようになってきて</u> 」「 <u>教師会の行事の振り返りとか、打ち合わせの時に、あ、あ、あ、先生方もいろいろな意見を出し合えるようになった⑤</u> 」ので、それも、園内研修を継続して発言しているところと与えられることで、私ももういろいろお話できるようになったし、ほかの先生もそうなのかなあと思います」 ・「 <u>自分の意見というか、思ったことだったり、悩んでることだったりを言える場っていうのは、すごく有難いですし、あと、それについてみんなで考えたりとか、意見も言ってくれだしたり、アドバイスしてくれだしたり⑥</u> っていうところでは、ほんとに、ああ、みんなでちゃんと理解しながら <u>歩いていこう⑥</u> っていうところがあるので、それは去年ない場なので有難いなどは思いました」
2 気づきのきっかけとなった	・「指導計画だったり、日案とか週案とかも <u>見直せるいいきっかけになった⑧</u> 」ので、そこもよかったと思います」 ・主任「第三者に来てもらって教わったりするのって、やっぱり、ほんとここだけの世界になっちゃうと、いろんなものがこの中の世界だけでいいってなっちゃう。ほんと、それこそ何も育たないしですね」「 <u>気づきのきっかけ⑩</u> みたいな、そういうのって私は大きくなって思うんですよ」
④疑問に思ったこと、わからなかったこと、悩んだこと	・「 <u>週案日案のフォームを早く改善しようしようっていうふうには話は結構前から出てたんですけど、どういうふう改善して行ったらいいのかわからない⑩</u> 」
⑥園内研修についての考え方の変化	・「 <u>園内研修って最初よくわからなかったんですけど、みんなの意見を言いやすいというか、自分の意見というか思ったことを安心して言える場であるなっていうふうには、変わったというか知ったというか⑦</u> 」「この園内研修をしたことが日課を決めたりとか、 <u>そういうところにつながったので、どんどんどん、そういういい方向というか反映できて⑧</u> 」 ・「 <u>研修っていう言葉がすごく自分の中で、はって重たかったんですけど</u> 」「でも言えるように、自分が意見を言ってるのが驚きじゃないんですけど、自分の中で、 <u>意見を言ってもいいんだじゃないんですけど、そういう考え方がほんと変わりました⑨</u> 」 ・「園内研修を続けていく中で、ちょっとした保育の悩みとか子どものこととかを言えるので、 <u>縦割りがあるからとかじゃなくて、ほんと小さな悩み、日々の保育の中での疑問とかがほんとに発言できるっていうのは、すごくそういう面ではこの園内研修っていうのは、今年度、大事な研修なんじゃないかなっていうふうには感じますね。そういう面ではやっぱり考え方がちょっと私の中で変わりましたね⑨</u> 」

1) 継続的な園内研修を行なうと聞いてどのように思ったか

「200X年度から継続的な園内研修を行なうことになったと聞いた時、どのように思いましたか」と質問すると、担任保育者のほとんど（4名）は園内研修と聞いてもよくわからなかったと話したが、主任のみは「楽しみな」思いがあったと話した（表4①）。

2) 戸惑ったこと

「200X年度の園内研修を振り返って、戸惑ったこと」として、担任保育者の中で保育経験の多い2名（5年目以上）は、話し合いを進めるために積極的に発言するよう努めながらも、発言後は言ってよかったのか戸

惑ったことを挙げた（表4②-1）。保育経験の少ない保育者2名（2年目）は、5回の園内研修のうち4回で行なった（表2参照）指導計画の話し合いで、結果がすぐに出ないことへの戸惑いを挙げた（表4②-2）。

3) よかったと思うこと

「200X年度の園内研修を振り返って、よかったこと」として、全員が自分の思いや考えを「言える」「話せる」「出し合える」ことを挙げ（表4③-1）、保育経験の多い担任保育者2名（5年目以上）は、園内研修以外の場でも話しやすくなったことも挙げた。また、主任を含めた保育経験の多い保育者2名（7年目以上）は、指導計画作成について見直す「気づき」のきっかけと

なったことも「よかったこと」として挙げた(表4③-2)。

4) 疑問に思ったこと、わからなかったこと、悩んだこと

「200X年度の園内研修を振り返って、疑問に思ったこと、わからなかったこと、悩んだこと」として、保育経験の少ない保育者4名(5年目以下)は、指導計画の改善点を挙げた(表4④)。

5) 今後の園内研修の中で考えて行きたいと思うこと

保育者が「今後の園内研修で、考えて行きたいと思うこと」として挙げた内容は様々であった(A園の保育でこれから大切にすること、指導計画、行事の見直し、次年度の計画、縦割り保育の園の見学等)。

6) 園内研修についての考え方の変化

「200X年度の園内研修を通して、あなたの園内研修についての考え方が変わった点」について質問すると、園内研修は「堅苦しい」(2名)、「堅い」「ドキドキするような」「重い」(各1名)ものだと考えていた保育者も、そうではなかった、「日々の保育の中での疑問」や「思ったことを安心して言える場」であると知った、考え方が変わったと話した(表4⑥)。

3 インタビューを終えて

インタビューを終えた感想を尋ねると、保育者たちは「率直に振り返る時間が持てた」「ちょっと気持ちは整理できた」等語り、このインタビュー自体が保育者に1学期の保育と園内研修についての意識的な振り返りを促す機会となったことを確認することができた。

IV 考察

本研究は、保育者の成長における保育実践の振り返りの意味について考えるため、保育体制が移行した園の移行年度1学期の保育と園内研修を取り上げ、保育者は保育体制の移行をどのようにとらえて保育を実践し、その実践をどのように振り返ったのか、そこには同年度から継続的に行なうようになった園内研修がどのような意味を持ったのか、保育者へのインタビューをもとに検討した。

保育体制が移行することを聞いた時に保育者たちは

不安を持ち、移行年度1学期の保育を実践する中でも、様々な点に戸惑い、悩むことが多かった。このような保育者にとって、副園長と主任が中心となって毎月計画し、外部から筆者も参加して継続的に行なうようになった園内研修は大きな意味を持っていた。

園内研修の場で保育者自身の「問題意識に沿う形で」(田代, 1996)「全同僚がそれぞれの立ち位置から発言し合い」(大場, 2007)、「共通理解の深まり」(中島, 2009)を図った上で実践し、また園内研修で振り返るというように「日々の保育実践との循環」(中島, 2009)を繰り返したことが、子どものための生活の流れの改善につながっていった(表4⑥波線部①)。

また、主任をはじめとする保育経験の多い保育者が、一人ひとりが自分の思いや考えを話してほしいという願いを持ち(表3⑤-2波線部②)、保育経験の少ない保育者も日々の保育を振り返って感じたことを話途中で(表4③-1波線部③)、自分の悩みを話して聞いてもらうとともに、他の保育者の悩みや意見も聞き、考える場を持つことができた(表4③-1波線部④)。このような園内研修を重ねる中で、次第に保育者間に「子どもや保育について話しやすい関係」(中島, 2009)が築かれ(表4③-1波線部⑤)、互いに理解し合い、支え合いながら保育実践を振り返ることができるようになり、「みんなで考えていこうとする保育者集団」(中島, 2009)へと成長していった(表4③-1波線部⑥)^{注2)}。そして、このような変化を保育者全員が「よかった」と振り返り、園内研修についての考えも変わっていった(表4⑥波線部⑦)。

保育実践とその振り返りを繰り返す中で、今までには見られなかった子どもの姿(表3③-1、⑦-1波線部⑧)を見ることができたことも、保育者たちは「よかった」ととらえ、そのことが子どもを見る目を問い直す「保育者の自己評価」(中島, 2009)にもつながり、より子ども自身の育つ力を信じる保育観の形成にもつながっていった(表3⑦-1波線部⑨)。

このように保育者全員で保育実践を振り返ることを繰り返す中で、何度も取り上げた指導計画については、保育経験によってとらえ方に大きな違いがあった。保育経験の多い保育者(7年目以上)にとってはこれまでの自分たちの指導計画作成のあり方を見直す「気づき」のきっかけとなり(表4③-2波線部⑩)、「よかった」と振り返ったのに対し、保育経験の少ない保育者(5年目以下)にとっては結果が見えないまま話し合いが続くことになり、「戸惑った」「悩んだ」と振り返っていた(表4②-2、④波線部⑪)。外部からの参加者で

ある筆者は、「保育者の主体的な園内研修への取り組みを支える」(中島, 2009)ことを大切にしたいと考え、指導計画についても保育者が主体的に考える方向性を示そうと努め、具体的な作成方法をあえて助言しなかった。しかし、このような話し合いが保育者の成長のための「気づき」のきっかけとなるためには、保育経験を重ねることが必要になると考えられる。

以上の考察をふまえ、今後はこの保育者たちが保育体制の移行年度にさらにどのように保育を実践し、その実践を振り返ったのか、また、そこには継続的に行なった園内研修がどのような意味を持ったのか、今回のインタビュー結果と200X年度末に実施したインタビュー結果との比較も行ないながら、1年間での変容も含めた考察をして行きたい。

注

- 1) インタビュースケジュール作成とインタビューの進め方については、下記の文献を参考にした。インタビュースケジュールをもとに、縦割り保育に移行した他園の保育者に予備インタビューをしたところ、質問項目等にわかりにくい点はなかったため、本インタビューも同様に実施した。
柴山真琴, 子どもエスノグラフィー入門, 新曜社, 2006
やまだようこ編, 質的心理学の方法-語りをきく-, 新曜社, 2007
- 2) 保育実践後の先輩保育者との話し合いをもとに新人保育者の変容について検討した金(2009)も、「保育実践の変容には、ともに振り返る「話し合い(対

話)」が、一方の教えと片方の学ぶという体制ではなく、「ともに悩み、ともに学ぶ」立場であること、さらにお互いのありのままの保育実践を認め合い「自分らしい保育」を見出す場であることが求められる」(p.77)と指摘している。

金攻志, 新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援のあり方-保育実践後の「保育者間の話し合い(対話)」の中から-, 保育学研究第47巻第1号, pp.66-78, 2009

引用文献

- 1) 田代和美, 保育カンファレンスの検討-第2部 研究者の立場から考える-, 保育学研究, 第34巻第1号, p.38, 1996
- 2) 大場幸夫: こどもの傍らに在ることの意味-保育臨床再考-, pp.150-151, 萌文書林, 2007
- 3) 同上 p.128
- 4) 中島寿子 保育の質を高めるための園内研修について考える-ある保育所の4年間の園内研修をもとに-, 保育の実践と研究, 第13巻第4号, pp.59-62, 2009

謝辞

園内研修への参加の機会を与您にいただき、インタビューにも協力して下さった先生方に心よりお礼申し上げます。

**The Significance of Reflecting on the Practice of Early
Childhood Education in the Growth of Kindergarten Teachers :
Based on the Experience of One Kindergarten that
Has Changed its System of Early Childhood Education**

Hisako Nakashima

<Abstract>

The current study is concerned with a particular kindergarten that has moved over to a system of early childhood education based on the idea of education for different years of age, the aim being to consider the significance of reflecting on the practice of kindergarten education in the growth of kindergarten teachers. On the basis of interviews with kindergarten teachers, this paper looks at early childhood education in the first term of the year after the change in the early childhood education system was made in order to examine how kindergarten teachers view these changes in the system, how they have reflected on early childhood education, and the significance of the training provided within the kindergarten that is going to be provided on a regular, ongoing basis from this first year on. It became clear as a result of this study that although kindergarten teachers are perplexed by various aspects of the change in the system of early childhood education, they generally take a positive view of the growth evident in children subject to this system of education for different years of age, this being a type of growth that has not been evident in children before, and they have clearly changed their outlook so that their approach to early childhood education is now one in which they are able to feel a greater sense of confidence in the ability of children to develop of their own accord. Ongoing training inside the kindergarten has made it possible gradually to establish relationships in which kindergarten teachers are able to discuss their own thoughts and ideas among themselves, and it is clearly highly significant that an environment has been created in which kindergarten teachers are able to reflect on their experience of early childhood education and to grow while providing each other with mutual support.

Keywords : education for different years of age, reflection, training inside the kindergarten, teachers' discussion among themselves, mutual support of kindergarten teachers